

国際古代法史学会（SIHDA）第 78 回大会（ハンガリー・ブダペスト）参加記

宮坂 渉

2025 年 8 月 26 日から 30 日にかけてハンガリーのブダペストで第 78 回国際古代法史学会（SIHDA）が開催された。ハンガリーでの開催は、1991 年に University of Miskolc で開催された第 45 回大会以来 34 年ぶりであり、大会案内動画でも「SIHDA がハンガリーに帰ってきた！」との字幕が印象的であった。今大会の開催校は、運営委員長 Chief Organiser の Gergely Deli 氏が所属する Ludovika University of Public Service、運営委員 Main Organiser の Éva Jakab 氏が所属する Károli Gáspár University of the Reformed Church in Hungary、Nadja El Beheiri 氏と János Erdődy 氏が所属する Pázmány Péter Catholic University、そして協力委員 Advisory Board の Gábor Hamza 氏と András Földi 氏らが所属する Eötvös Loránd University の 4 大学共催であった。

今回のテーマは Centre and Periphery: The Jurists of Rome, Imperial Legislation, and Practice in the Provinces であった。大会ウェブサイトの趣旨説明（<https://sihda2025.hu/#call-for-papers>）を報告者なりに理解すれば、帝国の中心であるローマと当時の属州パンノニアを含む帝国の周縁との関係は、中心で形成された法がいかにして周縁での紛争に適用されるかという側面と、周縁で生成された法がいかにして中心に取り入れられるかという側面とを有しており、「正しさ」と「誤り」、「原則」と「例外」とは絶えず揺れ動いていたはずであるが、そのことが従来の学術研究においてほとんど注目されてこなかったことから、そのような「一貫性」と「多様性」との間に見ら

れる力学に焦点が当てられるべきである、ということになろうか。



報告者は、開会式での基調報告が 3 名、一般報告が（パンフレット上では）146 名であった。開会式は 8 月 26 日、Károli Gáspár University（Károli Gáspár は 16 世紀の歴史家、牧師、ハンガリー語訳聖書の作者）の、カールヴィン広場 Kálvin tér からほど近くにある壮麗なホール（Károlyi-Csekonics Palace、19 世紀に建てられ、21 世紀に入って改築）で執り行われた。同大学の László Trócsányi 学長、Deli 氏、Jakab 氏、El Beheiri 氏からの挨拶に続いて、Wolfgang Ernst 氏、Patricio-Ignacio Carvajal Ramírez 氏、Wojciech Dajczak 氏による基調講演が行われた。Ernst 氏は夫婦間贈与の禁止と不当利得返還請求について、Carvajal 氏は *Digesta* と近代法典に見る法の一般原則について、Dajczak 氏は近世法学における西ヨーロッパとポーランドの関係について講演された。西ヨーロッパをローマ法研究

の地理的な「中心」とすれば（それ自体は異論もあるであろうが）、3名ともイングランド、チリ、ポーランドという地理的な「周縁」から来られたことは、今大会のテーマとも無関係ではなかろう。個人的には、Carvajal氏が2020年にチリで開催されるはずであったSIHDAに言及されたのが印象的であった。終了後は、ハンガリー国立博物館でレセプション・パーティーが行われた。1802年に設立された建物はネオ・クラシカルな作りで、華やかな雰囲気の中で大会参加者と旧交を温めた。地下にはパンノニア属州時代の出土品もあると知り、滞在中に再度訪問する計画を立てた。ちなみに宿泊場所（アパートメント）は博物館の目の前であり、建物はかなり古い様子であったが、部屋は広く快適であった。

8月27日、28日は、カールヴィン広場から地下鉄で（ブダペストの地下鉄は世界で3番目に古く、電気式では最古）2駅のところにキャンパスを構えるLudovika Universityで午前・午後のセッションが行われた。同大学は、1849年に設立されたハンガリー王立ルドヴィカ軍事学校に由来し、第二次世界大戦後は建物が荒廃していたものの、2014年に改装されたとのことである（なお、ルドヴィカの名は、1808年に設立資金を寄付した、オーストリア＝エステ大公女で、オーストリア皇帝フランツ2世の3度目の妃であったマリア・ルドヴィカ・フォン・エスターライヒ＝エステに由来）。セッションは5部屋に分かれ、ほとんどのセッションが報告者3名（一部4名）で構成された。各部屋にはハンガリー出身の5名のローマ法学者（Róbert Brósz, Elemér Pólay, Géza Marton, Ferenc Benedek, János Zlinszky）の名前が付けられ、その事績を伝えるパネルが設置されていた。27日のセッションの中で個人的に興味深かったのは、ヘル

クラネウム出土の蠟板文書に基づいて、ヘレンニア・テレンティアという女性が行った取引や彼女の遺産相続について論じた Jakab 氏の報告、ポンペイ出土のカエキリウス・ユクンドゥスの蠟板文書やスルピキウス家文書、ヘルクラネウム出土の蠟板文書を用いて、文書に見られる定型文言（*ex interrogatione facta tabellarum signatarum*、*ex nomine facto tabellis signatis*）の解釈について論じた Johannes Platschek 氏の報告、ポンペイの実地見分に基づいて、都市の道で馬車を走らせる御者は慎重な運転を強いられた、との仮説を立て、これを踏まえて D.19,2,13 pr で、馬車を転覆させた結果、奴隷を負傷または死亡させた御者が賃約訴権で訴えられるのは、馬車のスピードをコントロールさせるために奴隷を賃借していたからではないか、と論じた五十君麻里子氏の報告、スエトニウスのガルバ伝 9 節が伝える、不正を行った両替商に対する極めて過酷な処罰は、両替商の業務に従事していたのが実際には奴隷であったからではないか、と論じた Piotr Niczyporuk 氏の報告である。終了後はブダペスト国立西洋美術館でのコンサートとレセプション・パーティーが開かれた。西洋美術館は、1896 年にハンガリー建国 1000 年（!）を記念して建設され、記念柱や彫像が立ち並ぶ Hősök tere（英雄広場）に面しており、向かい側は現代美術館であった。西洋美術館の正面向かって右手は公園になっており、有名なセーチャーニ温泉もあるとのことであった。コンサートは美術館の展示室で行われ、長年 SIHDA に参加してこられた Földi 氏の情熱的なスピーチの後、弦楽四重奏とクラリネットの楽団が、ハイドンやブラームスがハンガリーからインスピレーションを得て作曲したハンガリー舞曲、ハンガリーの国民的作曲家であるコダーイとバルトークの民族楽曲等を

演奏し、楽しいひと時となった。レセプションは、キリスト教の壁画の間で行われ、ハンガリー産のワインと料理を味わった。

28日は、最終セッションに自身の報告が予定されており、かつ、報告の準備が終わっておらず、他のセッションでは集中力を欠いていたことを告白しなければならないが、それでも午前中に参加したセッションの報告は、3つすべてが *superficies* に関するもので興味深かった。最初の2つは共に University of Brasilia の João Costa-Neto 氏と João Guilherme Sarmento 氏の報告で、どちらもローマ時代エジプトについてであった。前者は、当時の慣習では（そして、現代でもなお！）土地に対する所有権とその上に立つ建物に対する所有権とを別々の者たちが有することがあり、支配者であるローマもこれを容認していた、と論じるものであった。後者は、当時の慣習では土地を「共同所有 *condominium*」することが認められており、特に、古代ギリシャの法伝統の下、夫から妻に所有権を一部移転する場面で、これが問題となった、というものであった。そして、森光氏の報告は、報告者の理解するところでは、D.43,18,1 で、他人の土地の上に *superficies* を有する者は、それを賃借したのであれば賃約に基づいて、それを買ったのであれば買主訴権に基づいて、土地の所有者を訴えることができる、とあるところ、この法理は、ある者が他人の土地の上にその他人によって建てられた建物を買った場合だけでなく、ある者が他人の建物を買ひ、その上にその他人によって建てられた建物（構造物）がある場合にも問題となることを指摘するものであった。午後のセッションでは、林智良氏が、クウィントゥス・ケルウィディウス・スカエウォラがギリシャ人の相談者に対して回答した D.17,1,60,4 を題材に、スカエウォラの回答活動につ

いて論じた。報告が建築工事の大きな音で妨害されたのは残念であったが、林氏が配布してくださったハンドアウトに論旨が記載されていたため、非常に助かった。午後に行われた報告者のセッションでは、韓国の Dschungmo Ivo Seong 氏、中国の Guodong Xu 氏と一緒にすることとなり、東アジア法に関心を持つ聴衆が集まることとなった。Seong 氏は *Digesta* に現れる *consuetudo*、*mos*、*mores* が単なる地方慣習として扱われたのか、あるいは拘束力を有する慣習法として扱われたのか、という問題について論じた。Xu 氏によれば、帝政期には統一法としての「ローマ法」が放棄され、各地域の規範が「慣習法」の名の下に法的効力を認められたところ、その法的効力について、社会契約説にも言及して論じるものであった。報告者は、古代ローマにおける競売実務について、非法文史料とスルビキウス家文書を中心に論じ、聴衆から有益なコメントと質問をいただくことができた。終了後は Ludovika University の馬場で、強い日差しの中、ハンガリーの伝統である騎馬と弓術のショーを観覧した。その後、大会プログラムでは Eötvös Loránd University 法学部で Folk Night と題するイベントが用意されていたが、報告者は自身の報告の後ということもあり、参加を見合わせた。

29日は舞台を Pázmány Péter Catholic University に移し、午前中に2つのセッション、昼食後に総会、そして夜にガラ・ディナーが行われた。報告者が参加した最終セッションの3つの報告は、いずれも人物研究であった。Białystok 大学出身の Aleksandra Niczyporuk 氏は17世紀リトアニアの法学者 Jan Marquart について、Pázmány Péter Catholic University 出身の Anna Mária Radványi 氏は、同大学で教鞭を取った János Zlinszky について、クラクフの Jagiellonian 大学の

Grzegorz Jan Blicharz 氏は 20 世紀ポーランドのローマ法学者 Henryk Kupiszewski について報告した。いずれの報告も、東ヨーロッパにおけるローマ法学の伝統について学ぶところ大であった。昼食後、János Zlinszky の名を冠した講堂で総会が執り行われた。冒頭、機器の不具合にハラハラさせられる面もあったが、開始後は式次第がスムーズに進行された。János Zlinszky や Felix Wubbe といったハンガリーにゆかりのローマ法学者と SIHDA の関わりが披露された後、物故者（Cosimo Cascione 氏、Luigi Labruna 氏、Antonino Metro 氏、Giuliana Foti Talamanca 氏、Mario Bretone 氏）が紹介され、それぞれ追悼演説が行われた。次いで、2026 年の第 79 回大会がスペインの Vigo で開催されること、テーマが「古代法における女性」であることが発表され、主催者の Maria-José Bravo Bosch 氏によって Vigo の街と大学とが紹介された。そして、記念すべき 2027 年の第 80 回大会がローマ大学サピエンツァとフィレンツェ大学との共催となることが公表された（2022 年から 1 年間、フィレンツェ大学で過ごした報告者にとっても嬉しい知らせであった）。総会終了後、報告者はハンガリー国立博物館地下のローマ時代の出土品を見学し、ローマの文物が帝国の周縁であったパンノニアに影響を及ぼし、混交していった様を見て取ることができた（もっとも、ブダペスト郊外にある当時の都市 Aquincum の遺跡を訪れることができなかったのは心残りであった）。ガラ・ディナーはドナウ川にほど近いヴィガドー・コンサートホールで盛大に開かれ、翌年の Vigo での再会を誓い合った。なお、宴の途中では、主催者の Deli 氏によって、西村重雄先生揮毫の書が紹介されるという一幕もあった。

翌 30 日のエクスカーションでは、1996 年に創設され、1996 年に

は世界遺産に指定された、ハンガリー最古の Pannonhalma のベネディクトゥス派修道院を訪問した。目当ての一つであった修道院の図書館は害虫の発生により残念ながら閉鎖されてしまっていたが、修道院と、その近くにありラベンダー等のハーブを栽培する農園、ワイン醸造所を見学することができた。

今回のブダペスト訪問は、Piotr Nyczyporuk 氏のご厚意により 8 月半ばから招聘教授として滞在したポーランドの Białystok からの旅であり、時差に悩まされることがなかったのは幸いであった。また、大会の前日にはブダ地区を歩き、王宮をはじめとした歴史的建造物を見学することができた他、大会の合間には聖イシュトヴァーン大聖堂やハンガリー国立歌劇場を訪れることができた。加えて、Białystok 大学の名誉教授であり、同大学と筑波大学との学術交流協定を締結した Emil Plywaczewski 氏の勧めで、ブダペスト郊外の János の丘（というよりは山）に登り、雄大な景色を堪能することができたことも良い思い出である。今回で 10 回目の参加となった SIHDA であるが、旧交を温めると共に、新たな出会いもあり、あらためて Société としての意義を噛みしめる機会となった。最後に、今回も（72 時間を要したポーランドへの往路も含め）同行してくれた妻に感謝の意を表したい。